

# 胸騒ぎのオフィス

*Anna & Hironobu*

---

日向唯稀

*Yuki Hyuga*

eternity



エタニティ文庫

## 目次

胸騒ぎのオフィス

5

書き下ろし番外編 胸騒ぎのマリッジ

327

胸騒ぎのオフィス

国内屈指のデパート銀座桜屋は、昨年きんざさくらやの春にリニューアルオープンしてからも、改革の手を止めることがなかった。

老舗しにせの高級店としての気品や威厳いげんを保ちつつ、次世代を担う若者達にも気軽に足を運んでもらえるようにと、各売り場の担当者達が常にアイデアを出し合い切磋琢磨せつたくましている。

デパートマン達だんが奔走するその姿は、ちょっとした企業ドラマのようだ。

三十歳を目前に控えた百目鬼杏奈ももくまは、こんな職場に通えるだけで毎日ワクワクしていた。

派遣契約の一事務員でしかないが、微力でもできることをしたい、ベストを尽くしたいと思ひ、日々の仕事に向かえることが嬉しかったのだが……

最近、オフィスの空気がかつてないほどピリピリしていた。

原因は、一週間後に迫った通称「御前会議ごぜんぎ」だ。社長を筆頭に、専務、常務の前で行

う社内プレゼンテーションがあるのだ。

銀座桜屋は来期、創立百周年を迎える。それに向け、各部署が勝負をかけた企画発表を行う。

特に杏奈が派遣されているここ、宝飾部門の企画販売室では、かつてない試みをしようとしていた。

それは、「Real Quality」という人気服飾ブランドとのコラボレーション企画だ。「Real Quality」は、(一)数年で二、三十代の女性から絶大な支持を集め、一躍有名ブランドの仲間入りを果たした新進気鋭のブランドである。

銀座桜屋の宝飾部門企画販売室ではこの企画を通し、老舗デパートとしての高価格品だけでなく、手の届きやすい価格の商品を展開して、これまで来場が少なかった年齢層を引き寄せようと考えていた。

もっとも、この類たぐいのことなら、すでにどこでもやっている。

それなのに、どうして皆がこれほど緊張しているのか、周囲の人は首を傾げるかもしれない。

だが、銀座桜屋には他のデパートと大きく違う点があった。

それは、銀座桜屋の成り立ちに関係がある。今は亡き、銀座桜屋の創立者・桜川一さくらがわいは、もともと「桜川宝石店さくらがわほうせきてん」の経営者でありデザイナーだった。そこからデパート業界へ進

出し、一代で今日の銀座桜屋の基礎を作った。

そのため、初代会長となった桜川一は、要となる宝飾部門だけは自社ブランドである「ジュエリー・SAKURA」の商品にこだわった。これを銀座桜屋の看板にしていたこともあり、創立以来宝飾部門では「ジュエリー・SAKURA」以外のブランドは扱っていないし、テナントも入っていないのだ。

今も宝飾デザイン・製作部門に関しては、創立者一族が引き継いでいる。

現在、陣頭指揮をとっているのも、社長の弟にして専務取締役の桜川統次チーフデザイナーだ。

つまり、銀座桜屋では、他社ブランドの導入や協賛企画を通すことが他のデパートとは比較にならないくらい難しいのだ。

しかし、だからといって、このピリピリさはただだけない。

杏奈は作業中、幾度もため息を漏らしていた。

空気が重くて、息苦しくなる。

「あー、もう。何よ、これ苛つく。本当、使えない」

杏奈の向かいの席では、パソコンを前に年配の女性チーフ・石垣が独り言を繰り返していた。

本人は小声のつもりかもしれないが、杏奈の耳にははっきりと聞こえてくる。いった

い何に追われているのかはわからないが、叩きつけるようなキータッチからは、余裕のなさが窺えた。

(石垣チーフ。普段はこんなじゃないのに……)

杏奈は気を逸らそうと横を見た。

すると、今度は杏奈から一つ席を空けた隣で、声を荒らげる男性社員、平塚の姿が目に入った。彼は杏奈と同年だ。

「だから、必要なのは「Real Quality」の最新コレクション資料。これは二期前のコレクションじゃないか。いったい何、見てるんだよ。デザインのモチーフを見ればすぐわかるだろう。わからないのは、勉強不足だぞ」

「すみませんでした。勘違いしました。すぐに最新のものを用意します」

平塚に注意されていたのは、今年入ったばかりの男性社員だった。

もともと宝飾関係の知識はなく、たまたまここに配属されたらしい。そのため彼は、ようやく自社製品を覚えたかどうかというところだ。そんな状態で他社製品のことを言われても、お手上げだろう。

興味のない者には、どれもこれも似たり寄ったりにしか見えないのが宝飾品だ。

ネックレスはネックレスだし、リングはリングだ。それ以外の何ものでもないだろう。とはいえ、銀座桜屋はブランドモチーフである「桜」のデザインを一貫して使い続け

ている。その点、自社製品は覚えやすい。叱られた彼も時間とともに愛着が湧くだろう。つまり、銀座桜屋の宝飾部門が、ジュエリー・SAKURAのみで勝負してきたのも一つの戦略なのだ。

一目見てどこの商品かわかるモチーフ。これはブランドとして不可欠な要素だ。

桜のモチーフは屋号や会社のロゴマークにも使われているだけに、ここに一石を投じるのは難しい。

だが、創立百周年を機に何かしらの変革をしなければという焦りがあるのも確かなのだが——それにしても、だ。

「頼むぞ！ マジで。これぐらい一目でわかるようになっておかないと、コラボも何もない。たとえ御前会議に通っても、『Real Quality』側から真剣味が無いってそっぽ向かれたら、それで終わるんだからな」

平塚が仕事熱心なのは伝わってきたが、その荒い口調からは、イライラや焦りも伝わってきた。

「はい！ わかりました。すぐに集め直してきます」

叱られた社員は一礼し、平塚に背を向ける。

そのまま急いで部屋を出たのだが、廊下に出たと同時に彼の舌打ちが聞こえた。部屋の中の空気がいつそう尖ったものになる。

特に平塚の機嫌は最悪なものになったようだ。

杏奈は視線をパソコン画面に戻すと、いつそう深いため息をついた。

（あーあ。みんな、よっぽどテンパってるのね）

派遣の杏奈を入れて、一室八人が集う部署だ。いつもは皆、あてつけがましく舌打ちをするようなことはない。

今の彼にしても、きつとミスをした自分にイラついて出てしまったのだろう。が、どうにもこうにも間が悪かった。叱られた腹いせにしか聞こえない。

「百目鬼。このデータ資料、先日渡した書類に追加してくれるか。まとめて明日中に返してくれればいいから」

「はい。わかりました」

ぶっきらぼうに資料を渡してくる平塚に、杏奈は条件反射で笑みを浮かべた。

すると、平塚が何を思ってたか、しみじみ言った。

「いいよな、派遣は気楽で」

思わずカチンとする。

杏奈の眉が吊り上った瞬間、平塚が、やばい、という目をした。

（結局、当たり先はこっち!?）

いつになく顔に出てしまったが、それでも言葉に出さず、グツと我慢する。

ここで肯定しようが、否定しようが、平塚の機嫌が悪くなることは目に見えている。それならどちらとも取れない会釈えしやくだけをして、仕事に専念するほうが得策だ。  
 (そう思うなら、あなたも派遣仕事をやったらいいじゃない。こっちはリスクもデメリツトも覚悟の上で、派遣業をしてるんだから)

その後は、意識して仕事に集中した。

与えられた仕事が楽うらくかどうかなんて、当事者にしかわからない。

そもそもどんな仕事であれ、楽な仕事なんてないと杏奈は思っている。それを楽しくこなすには、自分でモチベーションをコントロールするしかない。何に、どこに、やり甲斐を見出すみいだすかは、自分次第だ。

特に杏奈は、ワードやエクセル、パワーポイントなどを使用した書類作成や事務処理、経理記帳を専門にしていた。二言目には「誰でもできる仕事だ」と言われてしまう分、いかに早く正確に、また綺麗に仕上げるかに心血を注いだ。

単純作業だからこそ、作業効率とミスのなさの追求が、やり甲斐を生み出す自分の中の基準になっているのだ。

ただ、効率を上げれば上げただけ、社員がやるべき雑務を回されてしまう率も上がる。できないことでのフォローではなく、やりたくないことでのフォローに使われることも多々発生する。

これを上手く躱かわすのは、自分の仕事で満足するよりはるかに難しい。今の杏奈にとっては一番の課題だ。

(ふー。終了。嶋崎室長しまさきむろちやうから頼まれる仕事は、あれこれと注文が多いけど、それだけ内容が詰まっているから、仕上がるよと達成感が違うわ。けど、最近ちょっとしたミスが多いのよね。前はなかったのに……。よっぽど疲れてるのかしら？ これも御前会議の影響かな)

一つの仕事を終えて、手を止めた。

ホッと息を漏らすのが、それは先ほどついたため息とは明らかに違う。

(疲れた。目がシヨボシヨボする)

普段なら一区切りしたところで、お茶でも淹いれようかと席を立つ。

しかし、今日は室内に漂ただよう不穏な空気におされて、そんな気になれない。

杏奈は眼鏡を外して、専用のハンカチでデジタルガードレンズを拭ぬくと、すぐにかかけ直した。

実際、今日中に終えてしまいたい書類の清書や伝票整理は、あと三点あった。できれば明日の仕事スムーズにするために片付けてしまいたい。

そうでなくても、御前会議のプレゼンテーションは一週間後、来週の月曜日だ。杏奈の手元にあるものは、どれもこれもそこで使われるものなので、少しでも余裕をもって

依頼主に戻しておきたかった。

（もう三時近いのか。気合入れてやっちゃおうか。さっきのこれも、明日中でいいって言われてたけど、少しでも早く仕上げたら、平塚さんの機嫌が直るかもしれないし）

休憩は取らずに、パソコンの画面を切り替え、次の仕事に移った。

すると、突然立ち上がった石垣から、二、三センチぐらいの厚みを持った紙束を突きつけられた。

「百目鬼さん。このアンケートの回答、今すぐ集計して要点をまとめて戻してちょうだい」  
さも当然のように寄越される。

だが、厚みが厚みだけに、笑顔で受け取ることができなかった。

「今すぐですか」

「そうよ。できるだけでしょう、これぐらい」

石垣はこの企画室のみならず、銀座桜屋の中でも女帝的な存在だった。

営業上がりで、勤続年数は二十余年になる。五十代前半だが、どんなときでもきちんとメイクをし、タイトなスーツを着こなして、常に自分の存在をぶれないものになっている。小奇麗でいて貫録もあり、誰もが認める「デキる女」だ。

一度は寿退職したものの、その後上司からの声かけで復職した。今はチーフの座に甘んじているが、ブランクがなければ確実にもっと上の役職についていたであろう、会社

にもお客様にも求められて勤める、真のデパートウーマンだ。

ただ、そんな優れた石垣ではあったが、事務の仕事の経験はないらしく、この手の無茶ぶりが多かった。

これまでも何度となく「すぐにはできません」「ものによって、石垣チーフが思っている以上に時間がかかります」と説明してきたが、どうも忘れてしまいうらしい。

もしくは、「すぐに」が口癖なのかもしれない。

「一時間もいらないうわよね」

「すぐに」が一時間以内と設定されるようになっただけ、かなりマシだ。

それでも突きつけられた書類の厚みからみて、一時間で終わるとは思えない。

自身を確かめてから、所要時間を交渉しようと杏奈は思った。

しかし、石垣の気の短さは室内でもダントツだ。杏奈がすぐに「はい」と言っって手を出さなかったこの間にも、彼女の顔つきはみるみる変わっていく。

「なによ、その顔。これぐらいテキパキやつてもらわなかったら困るのよ。それに、こんな誰にでもできる仕事、こっちはあなたでなくてもいいのよ」

そうして今日も言われてしまった、お決まりの台詞。派遣社員にとっては、水戸黄門の印籠にも匹敵する威嚇であり脅し文句だ。

——なら、他を当たってください。



さらりと行って辞められたら、さぞ胸がスツとするだろう。しかし、現実はそのようなものではない。

杏奈はここでもグツと我慢をした。

無理矢理笑顔を作って、席を立つ。

「すみません。一時間以内というお約束はできませんけど、極力早くまとめるように努力しますので、それでよろしいでしょうか」

「そう。でも、必ず今日中には上げてね」

言われるまま用紙を受け取り、ざっと中身に目を通す。

（うわっ。これって店内アンケートも入っているじゃない。ネット回答分だけじゃなかったのね。半分は手書きだし、どう頑張っても一時間じゃ無理だって）

こうなったら今日までに終えたかった三点は、サービス残業をするか明日の午前中に作業するしかない。家には持ち帰れないし、かといって先にもらっているほうに遅れを出すわけにもいかない。

唯一の救いは、それらの戻しは明日中であればいいということだ。

「あの、石垣チーフ。このアンケートなんですけど、ネット回答分のデータをメールしていただけますか？」

「それがあつたら自分でやってるわよ。うっかり消しちゃったから頼んでるの。少しは

察してよ」

せめて半分あればと思いきや、「気が利かないわね」と言わんばかりにふて腐れられた。どうやら先ほど石垣がブツブツ言って殺気をまき散らしていたのは、この回答データが原因のようだ。

「すみませんでした」

杏奈の笑顔が歪んだまま固まった。

（だったら初めからそう言えばいいじゃない。データの一部を消しちゃったから、悪いけどお願いって。それなら二つ返事で、はいって言えるのに）

両手にずしりと重いアンケート用紙を、キーボードの脇へ置く。

こうなったら、刷り出しがあるだけマシと思おう。不幸中の幸いだと思えなければいけない。

何をどうやって削除したのかはわからないが、今までの経験上、消えたデータを探すぐらいなら、手元にあるものをまとめたほうが早いはずだ。

杏奈は諦めてアンケートの束をバラバラと捲った。

「ジュエリー・SAKURA」に関する年代別アンケート。価格からデザイン、品質までと、いつになく細かい。回答者の大半が来店客で、中高年の女性だ。だから手書きが多いのだろう。

内容を確認すると、石垣が急いできた理由は、一目瞭然<sup>いちりょうぜん</sup>だった。これもまた、御前会議用の資料に使われるものだったのだ。しかも、プレゼンテーションの核になるであろう部分。

「今日中に終わるわよね？」

息を呑んだ杏奈に、石垣が不安と緊張を込めて確認してきた。杏奈が「はい」と返事したと同時に、軽やかな声がかぶった。

「やだ、石垣チーフ。それぐらいでしたら、私に言ってくださればいいのに」  
女子高生でも引くような甘ったるくて高い声を響かせたのは、銀座桜屋一の美人社員と言われる三富<sup>みつみ</sup>だった。

綺麗<sup>きれい</sup>に巻かれ乱れることのないセミロングの髪に、くりっとした双眸<sup>そうまう</sup>。その目は長いまつ毛で彩<sup>いろど</sup>られ、パツチリしている。

身長は標準だが、色白でほっそりとしていて、華奢<sup>わしゃ</sup>な印象だ。

当然のことながら、男性社員の中ではアイドル的存在になっている。短大卒入社二年目ということもあり、恋人にしたい、やら妹にしたい、キャラのナンバーワンだ。

そんなルックスと持ち前の愛嬌で、彼女は入社以来、ジューエリー・S A K U R A の売り場担当をしている。

だが、今日ばかりは、そのテンションの高さが仇<sup>あだ</sup>になった。

「三富さんは担当違いでしょう」

石垣が深いため息をついた。

「だって、チーフ。たまにはデスクワークがしたいんですもの。いつも一日立ちっぱなしで、足がパンパンなんです。もう、百目鬼さんが羨<sup>うらや</sup>ましい。ずーっと座ってお仕事ができるなんて」

「でしたら今度、一日交代してみましようか。私、売り場の経験もあるので代われますよ」  
杏奈は適当に笑って返した。

「本当!? 百目鬼さんってば、もしかしてスーパー派遣さん? けど、さすがにここはお任せできないわ。銀座桜屋は歴史と伝統ある高級店よ。その辺の激安ショップと一緒にされても困るもの。販売員のルックスも、ふさわしくないからねえ」

アイドル並みの笑みを浮かべて、キャハッと返してきた三富に悪気はない。それはこれまでの付き合いで、十分杏奈も理解していた。

だが、思ったことは素直に全部口にしてしまう三富の辞書には、一般的にあっておかしくないだろう、失礼・後悔・反省の文字がどこにもない。

こんな会話が日々繰り返されて、二年近くも続いたら、そろそろ堪忍袋の緒も擦り減ってくる。

この職場で未だに一度もキレていないところで、杏奈の忍耐力や受け流し力はそうと

う高いと評価できるが、それでもこの短時間のうちに、平塚、石垣、三富と続くときすがにきつい。

杏奈が誇る鉄壁の作り笑顔も崩れそうだ。

そろそろぶち切れのカウントダウンに入っている。

（いや、待て。落ち着け私。直に契約が終わるのよ。秋から更新しなければ済む話よ。それまでの我慢だし辛抱よ。たかが派遣、されど派遣、波風立てずに消えていくのが私の身上でしょう！）

心の中で呪文のように唱える。

それでも無意識のうちに、利き手を握り締めるぐらいは許されるだろうと思いたい。

杏奈は、「そう。なら仕方ないわね。三富さんにしかできない仕事だもの、頑張つて」と言おうとした。だが――

「あ、そろそろ戻らなきゃ。せっかくの休憩なのに、立ち話で終わっちゃった。では、みなさん、ご機嫌よう〜」

三富は言いたいことだけ言うと、すっきりしたのでらう。こぼした愚痴に反して足取りも軽く、再び売り場に戻って行った。

杏奈は渾身の笑顔と嫌味をぶつける前に、さらっと逃げられてしまう。

ただ、こんな三富ではあるが、彼女は彼女なりに一流パートの売り場に立っている

という自負があるらしく、自分磨きに余念がない。

それは、入社以来一度も乱したことはないヘアセットやメイク、ネイル一つにも表れている。給料やボーナスで自社製品を買って身に着け、日々ジュエリー・SAKUR Aの看板娘に徹し、またそれを維持し続けている。

仮におしゃれが趣味や生き甲斐、習慣であったとしても、そこには間違いなくプロ意識がある。

長い髪は三つ編みにして一纏め、メイクはファンデーションにほんのり色づくリップだけという手抜きな自分からしたら、女性の鑑だ。

――と、懸命に三富のいいところを探すことで、杏奈は体内に溜まっていくストレスをどうにかごまかしていく。

（そう。悪気がないんだから仕方がないの。実際彼女は綺麗だし、可愛いし、何より若い。平塚さんだって仕事熱心のあまり熱くなってるだけだし、石垣さんも以下同文。契約が切ればそれきりの私とは、立場も責任も違うんだから。ここは踏ん張りどころよ。とにかく、今の山は御前会議。やれるだけのことをやらないとねっ!!）

杏奈は握り締めていた拳を解くと、回答データの束を手を取った。  
よし！ と気合を入れて、パソコンに新たなエクセル画面を出す。

だが、ようやく気を持ち直したところで、「百目鬼」と呼ばれた。

これで四人目！ 悪気がないのは十分承知だが、どうしても「今度は何よ！」という気分になってしまう。杏奈は、嘔みつきそうな勢いで振り返った。

「はい。なんでしようか」

「預けた書類、指示通りに要点をまとめ直してくれたか？」

相手は三富と入れ違うように部屋へ戻って来た、宝飾部門企画販売室室長・嶋崎博信（ひろのぶ）だった。

背後には彼の友人で、今回の企画に一枚噛んでいるらしいと噂の常務、桜川陽彦（はるひこ）が控えている。

「はい。こちらにできてます」

「見せてくれ」

直に三十五歳になる嶋崎は、銀座桜屋の社員としては珍しく、大学中退での入社だった。大学在学中に父親が交通事故で他界したため、学業を続けられなかったらしい。それでも、元東大生だ。

入社当時から逸材ぶりを発揮し、今のポジションまで昇ってきたという、超がつく実力派だ。

突出して目立つようなハンサムではないが、中肉長身でルックスそのものは悪くない。言動がはっきりしていて、常に態度が一貫しているためか、同性の受けもいい。

長年宝飾部門を担当しているだけあり、さりげなく付けられたカフスやタイピンひとつをとっても洒落たものが多い。いつ売り場に出て、お客様と接するかわからないという立場もあって、常にワイシャツはピンとノリがきいており、ネクタイもきちんとしていく。

清潔感の中にも、完成された男の色気があって、当然のことながら婚活中の女性社員には大人気だ。

「自分でも頑張れば手が届くかもしれない」というほどよい距離感や存在感がいらいらしく、彼と同期入社である派手なイケメン社長子息、桜川陽彦と、人気を二分している。

杏奈がこの職場を「企業ドラマみたいだ」と思う要因のひとつは、間違いなくこの嶋崎にある。

そして、この嶋崎が浮かない、個性派ぞろいの部下達——お局の石垣（いしぎ）や空気が読めない三富、直情型の平塚に疲労困憊（こぼれあう）中の新人など——の存在も。

「あ、室長。予算集計で数カ所ミスがありましたので、こちらで直しています。該当箇所（ふせん）に付箋（ふせん）を貼っておきましたので……」

杏奈は、嶋崎が付箋のついたページを開いたので、席から立ち上がった。聞かれる前にも思い、一言添えたのだ。

嶋崎の肩越しに、「お前がミスなんて珍しいな」と、陽彦が書類（しよるい）を覗（のぞ）く。

「これ見よがしに言わなくても、見ればわかるよ。気が利かないな」

よほど嫌なことでもあったのか、疲労が溜まっていたのか。それともそばに桜川がいたからなのか、嶋崎が吐き捨てるように答えた。

思いがけない返事をされて、杏奈の中で何かが切れた。

そう、騙し騙し繋いできた、堪忍袋の緒だ。

「ありがとうございます」

喉もとで止めたつもりだったが、しつかり声になっていた。

「え？」

嶋崎が目を通していた書類から顔を上げ、杏奈の顔をマジマジと見てきた。

石垣や平塚も、杏奈を見ている。

——まずい！

杏奈はすぐに笑ってごまかした。

「失礼しました。次からは気をつけます。では、急ぎの仕事がありますので」

軽く会釈をして、その後は一心不乱に作業をした。

嶋崎は書類を手に、何度か杏奈に視線を向けていたようだが、結局それ以上言ってくることはなかった。

## 2

その日の夜のことだった。

杏奈は一時間ほどサービズ残業をして、本日の業務を終わらせた。

「お疲れ様でした。お先に失礼します」

石垣から回された回答データは内容が細かく、思いのほか手間取った。そのため、予定していた三点までは手が回らず、明日中に仕上げることに決めて会社を出たのだ。

そうして杏奈が向かった先は、独り暮らしの賃貸マンションではなく六本木だった。

月火木金の四日間、老舗のナイトクラブでアルバイトをしている。

「マスター。おはようございます」

「おはよう。杏奈」

雑居ビルのワンフロアを使って営業している、六本木サンドリヨン<sup>®</sup>は、今で言うところのキャバクラとは違う。

かといって、バブル期前に流行ったような高級クラブやキャバレーとも違い、派手に着飾ったホステス達がナンバーワン争いに火花を散らすようなギスギスした店ではない。

設定価格はかなり良心的で、小洒落たダイニングバーに、小奇麗な身なりの女性がついて接客をするだけだ。

座席数もカウンターを含めて百席ほど。そこで働く女性も大学生から杏奈のちよっと上ぐらいまでと幅が広く、どちらかといえばアットホームなクラブといえるだろう。

そのため、ここへ通う人もリピーターが中心だ。常連客は近場のサラリーマンや個人経営者といった、中所得者が多い。

そして、店名にもなっている「サンドリヨン」はフランス語でシンデレラのことだが、これは訪れた男性客を「ガラスの靴の持ち主を探し求める王子様」に見立ててつけられたもので、オーナー兼マスターの遊び心が窺える。

その上彼はバーテンダーとしても一流で、彼の作るカクテルを目当てに女性同士で訪れる客も少なくない。純粹に酒を楽しむカウンター専門の客も多く、だからこそ杏奈を始めたとするホステス達も、安心して居着いてしまっただが――

何にしてもサンドリヨンのナンバーワンは、間違いなくマスターだ。

ダンディでロマンスグレーがよく似合う、それでいて気さくな老紳士。

杏奈はマスターの笑顔を見て、ホッとした。

今日初めて浮かんだだろう心からの笑顔で、店の奥へと進み、パウダールームと更衣室が一緒になったスタッフ専用の控室の扉を開けた。

「おはよう」

杏奈は三富と同じ年ぐらいの女の子達に声をかける。

部屋には早番の子達が十人ほどいた。

「おはようございます」

「おはようございます、杏奈さん」

挨拶を交わすと、杏奈は壁一面に備え付けられたクローゼットの中から、着替え用に置いてあるドレスを選んだ。

今日は午後から立て続けにいろいろあったせいかわ、赤のイブニングに手が伸びた。これは店でしか着ないし、たとえば披露宴に着ていくのにも絶対に敬遠する色だ。

しかし、だからこそ気持ち切り替わる。いい具合にモチベーションが上がると、杏奈の持ち衣装の中でも一番派手なイブニングドレスだ。

すると、それを見ていた女の子達がそろって笑った。

「杏奈さん。そのドレスってことは、今夜はいつも以上に大変身ですね」

「久しぶりにガンガンいっちゃおうかなって気分なんですか？」

「――は？ 何、それ。普段の私がよっぽど手抜きかズボラって言いたいなの？」

妙にワクワクした目を向けられ、杏奈も釣られたように笑った。

「いえいえ、夜の普段じゃなくて昼の普段からの大変身って意味ですよ」

「そうそう。通勤服とはいえないいつも地味だし、髪は三つ編みアップでメイクもナチュラル通り越してほとんどすっぱい。その眼鏡もパソコン用なのはわかりますけど、いかにもお局さんっぽくて、なんかいまいちなんですよね」

「本当。杏奈さんってば、お店に出ているときとは大違いなんですもん。私達、いつももつたないって言ってるんですよ。どうして朝から気合入れないんだろうって」

若手の会話が容赦がないのはどこも一緒だ。杏奈がお局さんの存在なのは派遣先ではなく、むしろこの店のほうだった。

気がつけば仕事帰りに通い始めて七年近い。

今では一番の古株になっていて、その分仲間への気遣いは少なくて済む。

「こういうのをTPOをわきまえるっていうの」

「派遣先が厳しいってことですか?」

「そういうえば、杏奈さんが回される職場って、お堅い老舗や大手企業が多いって、言ってますもんね」

「——まあね。でも、実際のところは面倒くさいっていうのが一番の理由かな。朝は五分でも長く寝たいから」

「うわっ! それ説得力ある」

「杏奈さんってば」

杏奈がこんな調子なので、若い子達も気兼ねがない。

だが、それでも最低限の上下関係と礼儀は守られているし、笑顔も絶えなかった。

「——さてと」

意識を切り替えると、杏奈は赤いイブニングドレスに着替えた。

ドレッサーに向かい、手早く化粧を直し始める。

アイメイクを中心に濃淡をはっきりさせていく。まつ毛をマスカラでポリウムアップし、リップもドレスに合わせて深紅をチョイス。昼にはつけないグロスで艶々に仕上げたら、あつという間にメイクも終わりだ。

あとは三つ編みにしていた髪を解いて、ほどよくウェーブがかかった長い髪をヘアスプレーでふんわりと落ち着かせるだけで、かなりゴージャスな仕上がりになる。

白い胸元にちよつとしたジュエリーを飾って、踵の太い五センチヒールを八センチのピンヒールに履き替えれば完璧だ。

この姿から日中パソコン前に座る杏奈の姿は、誰も想像しないだろう。平塚辺りが見たら、真顔で「化けた」と言いそうだ。

「よし。完成」

すべての支度を終えると、杏奈はライターを挟んだハンカチだけを持って勢いよく立ち上がった。

一部始終を見ていた女の子達からは、なんとも言えないため息が漏れる。

「杏奈さんってば、完成<sup>せいちゆう</sup>はないでしょう。だから変身<sup>へんしん</sup>って言われちゃうんですよ」

杏奈は際立った美人ではないが、化粧映えのする目鼻立ちを持つていた。

加えて身長が百六十八センチと意外に高く、体型も平均的で悪くないので、こうして飾り立てると存在感が格段に増す。

普段が普段だけに、その変貌ぶりはとてもあざやかだ。

だが、だからこそ彼女達は口をそろえて「もったいない」と連呼する。杏奈の割り切り方があまりにはっきりしているため、同性としての嫉妬<sup>しつと</sup>が起こらないのだという。

「そうですね。ここは完璧って言わなきゃ」

「本当、宝の持ち腐れですよね」

まるでずぼらな姉を見て、妹達が愚痴<sup>ぐち</sup>っているようだった。

それが可笑しくて、嬉しくて、杏奈の笑顔に輝きが増した。日中食らった八つ当たり四連続の衝撃も、完全に吹っ切れる。

「そう？ あなた達のピッチピチした肌や若さ以上に、宝なんてないと思うけど」

「もう、杏奈さんってば！」

年下の子達とじゃれあいながらも、「じゃ、行こうか」と店内へ向かう。

すでに店内には、仕事終わりの客達が、ちらほらと来店している。

杏奈の姿を見ると、マスターがカウンターのの中から手招きをした。

「——杏奈。今、永沢<sup>ながさわ</sup>さんが来たところだから、すぐに七番テーブルへ頼むよ」

「はい。マスター」

言われるまま店内を移動し、席へ向かう。

自然と背筋がピンと伸びる瞬間だ。

（永沢さんか。いつもは週末だけなのに、月曜からなんて珍しいわね。何かあったとかじゃないといいけど）

週に五日間フルタイムの派遣仕事に、四日は夜のアルバイト。正直、身体はきつい。

だが、それでも杏奈は、お金だけは貯めておこうと決めて、これらの仕事を両立していた。

何かのときに自分を守ってくれるのは、やはりお金だ。

悔いのない選択をする勇氣を与えてくれて、そして後押しをしてくれるのは家族や友人達だと言えるかもしれない。それでも、迷いなく決断や実行をするとき、先立つ物は不可欠だ。

最初に勤めた会社を辞めざるを得ない状況に追い込まれてから、杏奈はそのことを思い知った。以来、この生活をしている。

始めた頃は無我夢中で、今思えば余裕のかけらもない状態だった。



勤めること、稼ぐことに振り回されて、心身共に疲れきっていた時期もある。だが、サンドリヨンは大マスターの人柄もよいが、彼を慕って来店する客層もまたよかった。

杏奈はここでいろんな世代、職種の人と出会った。そして、百人にいれば百通りの人生経験があることを知り、いつしか肩から力が抜けた。自然と視野や思考が広がり、学校では習わなかった知識も増えて、働くことが楽しくなったのだ。

すると、疲れきっていたはずの心身が心地よい疲労感を覚えるようになり、仕事や職場に対しても見る目が変わった。

派遣やバイトの中ではあるが、自分なりにやり甲斐も感じられるようになった。

これらは杏奈にとって、とても大きなことだった。

今、四人掛けの七番テーブルで杏奈を待っている永沢にしても、彼女にいろんな知識や考えかたをもたらしてくれた常連客の一人だ。

マスターの古くからの知り合いでもある。

「いらっしやいませ。永沢さん」

「やあ。寄らせてもらったよ」

愛妻家である永沢が、ここを訪れるのは月に二度か三度。とにもかくにもマナーがよくて、綺麗な飲みかたをする男性だ。

建築事務所の社長兼デザイナーとあって、杏奈は彼の愚痴を聞いていただけでもとても勉強になった。

二回に一回は一緒に来店する彼の妻も気さくで優しく、杏奈のことを妹のように可愛がってくれていた。そのおかげもあって、永沢は来るたびに必ず杏奈を指名してくれる。

杏奈は、テーブル上に並べられた二人分のおしぼりやコースター、キープされたポトルを見て、今夜も妻を同伴しているのだと思った。

「奥様は遅れて見えられるんですか？」

「いや、今日は大学時代からの友人を連れて来たんだ。今、お手洗いに行ってるんだけど、なんか会社でいろいろあったみたいでさ。でも、こういうときって、全くの部外者のほうが、愚痴も聞きやすいだろう。だから杏奈も、そのつもりで頼むよ」

訳ありの同伴者と知らされ、瞬時に気持ちを入れ替えた。

「わかりました。私にできることがあれば……」

「——と、戻って来た。嶋崎」

永沢が口にした名前に、杏奈は一瞬固まった。

まさかと思いつながら、双眸を眇める。

(嶋崎……室長!?)

トイレから戻ってきたのは、杏奈がよく知る嶋崎その人だった。

決して、名字が同じだけの別人ではない。

だが、真つ直ぐにこちらへ向かつてくる彼は、どこかいつもと雰囲気違っていた。よく見ればスーツの前が開いている。ネクタイもなく、シャツのボタンも上から二つほど外れており、日中と同じスーツだが、着こなしはかなりラフだった。

日中の、きつちりした格好とは印象が違う。

「っ！」

戸惑う杏奈に気づいた嶋崎が、一瞬両目を見開いた。

すぐに名前がでなかったのは、彼も杏奈が自分の知る女性なのかどうか、悩んだのかもしれない。

それほどドレスアップし、きちんとメイクした杏奈の変貌よりは、すごいのだ。

まして今夜は、手持ちの中でも一番派手な赤のイブニングドレスだ。普段派遣先では決して見せることのない首からデコルテ、両腕まで露わになっている。メイクもしっかりと施しており、リップは一番目立つ深紅だ。

「さ、座って」

永沢から席を勧められるも、二人共すぐには身体が動かなかった。

杏奈は今にも何かを言い出しそうな嶋崎を見て、席につく前に先手を打つ。

「いらっしやいませ。初めまして、杏奈です」

「——あ。どうも。嶋崎です」

さすがに仕事ができる男は、社外であっても勤がよかった。

嶋崎は杏奈が発した「初めまして」に反射的とはいえ応じてくれた。そして彼は軽く会釈をし、戸惑いながらも問いたですようなことはせず、黙って席についた。

ただ、内心動揺しているのか、おしほりを手に取り、必要以上に拭いている。

「お飲み物はどうなさいますか？ 水割りをお作りしますか？」

「えっと、じゃあ、とりあえずビールを」

「では、ただ今お持ちしますね」

杏奈はオーダーを聞くと席には座らず、いったんカウンターへ逃亡した。

本当ならば、席についたままウェイターを呼ぶところだが、今はこの事実をマスターに知らせることを優先した。

「マスター、七番でビール。あと、お願いがあるんですけど」

「どうしたんだい」

「実は……」

杏奈はマスターに事情を説明すると、できるだけ早く他の席に移動させてもらえるように頼み込んだ。

「派遣先の上司か」

「はい。バレてしまったのは仕方ないにしても、せっかくお友達と来ているのに、部下の接客じゃ愚痴をこぼせないかと。お客様が寛げないと思うので」

杏奈が離席を願った理由は、一にも二にも嶋崎を氣遣ったことだった。

「それは、そうだね。わかったよ。適当に声をかけるから、少しだけ繋いで待っていて」

「はい。ありがとうございます」

マスターの理解を得られて、かなりホッとした。

その後は何ごともなかったように席へ戻る。

「お待ちせしました。ビールをお持ちしました」

サンドリヨンの店内の装飾は、品がある。大理石風のテーブルに濃紺のビロードが貼られた座席。そこに老舗らしい、レトロな趣がある。

その中に溶け込んで接客する杏奈の所作は普段とは違う。

それを嶋崎は不思議そうに見ていた。

（それにしても、会社の愚痴か……。今日の私のことだったら、目も当てられないわね）  
永沢が嶋崎を連れてきた理由を聞いてしまったので、杏奈はこれまでは感じたことのない緊張を覚えていた。

それもあって、遠慮がちに嶋崎の隣へ座る。

「失礼します」

「——どうぞ」

ドレスの裾を押さえて浅く腰掛ける。

わずかに腕と腕が触れた瞬間、嶋崎がビクリとしたのが伝わってきた。

「あ、すみません」

「いや。こちらこそ」

ぎこちない会話だった。

嶋崎のほうも、明らかに動揺していた。

目と目が合うと、二人そろって作り笑いが浮かぶ。

永沢は照れ隠しかと思っているようだが、杏奈と嶋崎としては間違いなく苦笑だ。

そのことは、互いに気づいている。

（イブニングドレスなんて選ばなきゃよかった。でも、さすがは嶋崎室長ね。スーツのマテリアルが上質。英国産かな？ 感触が滑らかですごくよかった）

杏奈は氣を取り直すために、あえて意識を服の素材に向けた。

仕事柄、嶋崎が普段から仕立てのいいスーツを着用しているのはわかってきた。

だが、スーツの素材までは、見ただけではわからない。

しかし、今夜は素肌で触れたので、はっきりと感じ取ることができた。嶋崎は杏奈が思っていたより、そうとうスーツにこだわっている。

嶋崎は、特別高価な時計などは身に着けていない分、かわりに、スーツ一点に絞って、自分をプロデュースしているのかもしれない。これも仕事への意欲と自尊心の表れだろうか。

制服などない、自前のスーツが戦闘服になる職場だ。

(嶋崎室長らしい選択ね)

彼の下で働くようになり、かれこれ二年近くになるが、今夜初めて知ったことだ。

ようやく杏奈に、素の笑顔が戻る。

「改めまして。ようこそ、サンドリヨンへ」

「どうも」

思えば嶋崎とは、これまでであった職場の飲み会などでも、一度として隣り合ったことがなかった。

彼の周りには常に若手社員がいる。決して女性だけが集まるわけではなく、同じくらい同性の社員もいる。

いつも人に囲まれているので、派遣の杏奈がお酌に行く必要はなかった。

当然ランチと一緒にしたこともないし、そもそも頼まれた仕事のやり取り以外はしたことがない。

それだけに、今になってこんな場所で会ったことが、杏奈にも不思議だった。

こういうのを因縁と言うのだろうか？

日中のやり取りのためか、縁といっても、いいものだとはいえない。

「杏奈も好きなものの頼んでいいよ。なんならドンペリでもいく？ 今夜は嶋崎に会えて気分がいいんだ。奮発するよ」

「いえ。せっかくですから一緒にビールで」

同伴してきた友人を気遣ったのことはだろうが、永沢はいつも以上にノリがよかった。だが、すぐに席を移動することがわかっていて、高価なオーダーはできない。

杏奈は笑ってビールグラスに手を伸ばした。

「いいのか？ あ、もしかして、これから指名が入ってる？」

「そんなことは……あ、どうぞ」

永沢に鋭い指摘をされつつも、杏奈は隣で煙草たばこを手にした嶋崎にライターの火を差し出した。

こればかりは条件反射だ。考える前に杏奈の身体は動いている。

「ありがとう」

嶋崎の目が、また驚いていた。

(こういう気は遣えるんだな、とか思われたかしら？)

今の杏奈が彼の目にどんなふう映っているのか、それはわからない。

だが、手にした煙草を唾<sup>たばこ</sup>える嶋崎の仕草は、これまで一度も見ることがないものだった。挿<sup>しえん</sup>らいた紫煙の奥に見える横顔は、間違<sup>まちが</sup>いなく日頃は目にしないプライベートの彼<sup>かれ</sup>だ。(へー。こうしてみると、なんだかいつもより男<sup>おとこ</sup>っぽく見えるから不思議ね。男の人でも、こういったアイテムひとつで、けっこう印象が変わるのね)

杏奈は単純に思った。

ふと、嶋崎と目が合う。

「君も吸う？」

「いえ、私は」

煙草を出されて、丁重に断る。

「そう。ヘビースモーカーに見えるのに」

「——よく言われませう」

ようやくこの場に馴染<sup>なじ</sup>んできたのか、嶋崎が笑った。

だが、こんな些細<sup>ささい</sup>なやり取りが、浮上<sup>うわ</sup>しかけた杏奈の気分を一気に落とした。

(やっぱり嶋崎室長も同じか)

無意識のうちに何か期待でもしていたのだろうか。杏奈は嶋崎からの一言を、とても残念に感じていたのだ。

嶋崎は、職場が同じという以外に何の接点もない相手だ。だから自分の何をわかって

いるわけでもないの、見た目で判断されるのは当然だ。

おそらく嶋崎は今夜の「派手な杏奈」が本来の姿だと認識したのだろう。

「そう。ヘビースモーカーに見えるのに」

(まあ、いいけどね)

杏奈は静かに深呼吸をした。

グラスが空になる手前で声をかける。

「ビールの後はウイスキーでよろしいですか？」

「ああ。ダブルで頼むよ」

「はい。永沢さんはいつも通りで？」

「うん。いつも通りで」

その後も杏奈は取り留めのない世間話で繋<sup>つな</sup>ぎつつ、マスターが席の移動を指示してくれるのをじりじりと待っていた。

一分が、一秒が、こんなに長く感じたのは久しぶりだ。

話が仕事や職場のことに移らないうちに、どうにかこの場を去りたいと願う。

「失礼します。杏奈さん、二十番の席へ」

ウェイターが代わりの子<sup>こ</sup>を連れて声をかけに来たときには、思わずテーブルの下でガッツポーズが出た。

「待って、どうということ」

「すみません、永沢様。気難しいお客様がお見えになったもので……」

「——そう。なら仕方ないか。曲者処理班くせものだもんな、杏奈は」

永沢には本当に申し訳ないと思っただが、杏奈は深々と頭を下げて席を立った。

「それでは失礼します。ごゆっくりどうぞ」

「ああ」

安堵あんどからか、つい本気で微笑んでしまったが、嶋崎は何か腑ふに落ちないといった顔をしていた。

席からの移動中、背中に刺さるような視線を感じたのは気のせいだろうか？

(どうか思い過ごしでありますように——)

杏奈は祈りながら二十番テーブルへ着いた。

「いらっしやいませ」

「ああ、待ってたよ、杏奈ちゃん。聞いてくれよ、今日会社で上司がさ——」

今夜も常連客の愚痴ぐち聞きに徹しつつ、杏奈は終業時間までを過ごした。

### 3

いつになく気疲れをした日の、翌日のことだった。杏奈はいつも通り、銀座桜屋に出勤していた。

まだ週の前半だというのは辛い。

体力以前に気持ちがいんどいと杏奈は思ったが、それでも仕事は山積みだ。やつても

やつても、あとから増えてくる。

(今週は諦めるしかないか)

今日はまだ火曜日だ。

御前会議に向けて、誰もがヒートアップしていくのが予想できるだけに、杏奈は安易に仕事を受けないよう、先に自分の請け負える分の用途を立てた。

何をどう頑張ったところで、一人がこなせる仕事量は限られている。

頼まれたときに「できる」「できない」「やるとしたらいつまでかかる」を明確に示すのも、自分の仕事だ。

「百目鬼さん」

朝からピリピリとした口調で声をかけてきたのは石垣だった。

「はい」

「これ、昨日の分に抜けがあったみたいの。追加して、すぐにデータ集計出し直して。午後のミーティングで使うから、今すぐに」

「——はい」

相変わらず自分の仕事しか見えていないようだった。「すぐに」と言うわりに、またデータ集計の刷り出しのみが寄越される。

（昨日の抜けって、それは石垣チーフのミスよね？　せめて「悪いけど」ってつけてくれたら、違うんだけどなあ）

この分のデータが、昨日壊したデータの中にあるものなのかはわからない。

ただ、ここで「データがあるなら欲しい」と言って、また石垣の機嫌をそこねるくらいなら、自力で打ち込んでしまったほうが気は楽だ。

杏奈は昨日のうちに仕上げた集計表をパソコン画面に呼び出し、追加データを入力していった。

石垣は簡単に言ってくれるが、渡されたのはアンケートの回答だ。

数字だけの打ち込みではない上に、書かれた内容の要点をまとめていかなければならず、手間はそれなりにかかる。

（やっぱり顧客の年齢層が高いせいか、最近のブランドへの関心はないに等しいわね。そもそも本物志向、腐っても鯛うなぎって考えの相手に、どうやってデザイン主義の『Premium Quality』を売るのかしら？　こういう人達って、あれよね？　そもそも宝石でも天然か人工かをものすごく重視するのよね？　どんなにデザインが素敵でも、偽物じゃあ価値はないわ、って考えでしょうに。まさか、若い顧客だけをターゲットにするつもりなのかしら？）

それでもこれが「お客様からの大切な声」だと思っから、杏奈は一つ一つ見落としのないように確認していった。

集計しながらも、銀座桜屋の常連客の志向や価値観を自分なりに理解していく。しかし、いい具合に集中し始めたところへ、今度は平塚が声をかけてくる。

「百目鬼。俺が頼んだ書類って上がってる？」

「あ、ごめんなさい。まだです。今日中には上げておきますから」

「なんだよ。前もって渡したのに、もっと要領よくやってくれよ。そんなんだから、いつまでたっても正社員の話がこないんだぞ」

着席している杏奈を見下ろすように立つ平塚。

だが、これはそんな立ち位置の問題ではない。

明らかに上から目線でこられて、杏奈はカチンときた。

（今日中でいいって言ったのは、そっちじゃない）  
 一応「すみません」とは返したが、いったいなんの関係があるのかという話までされて、気分が悪くて仕方がなかった。

「まあいいや。俺、これから出てくるから、上がったらメールで送っといて」「わかりました」

仕事の優先順位を変えたのは、自分だから仕方がない、と心の中で無理やり納得させる。事実、昨日予定通りに上げていれば、こんなことを言われなくて済んだのだから。

だが、仮にそうだとしても、どうして平塚から正社員うんぬんとまで言われなければいけないのか。腹が立って仕方がない。

杏奈は好きで派遣をやっている。

自分の口から「正社員になりたい」と言ったことはただの一度もないし、思ってもいない。

そもそもこの銀座桜屋に通うのも今期限りのつもりだったし、契約の延長など考えたこともなかった。

さすがにすぐには気持ちを切り替えられず、杏奈はいったん席を立った。

（はー。コーヒーでも飲もう。さすがに一呼吸おかないと、やってられないわ）

足元にあったゴミ箱を蹴りそうになった自分を抑えて、部屋の外へ出た。

給湯室へ行き、自分で買い置きしているコーヒーを濃い目に淹れた。

普段なら部内の全員に用意するところだが、今日ばかりはそんな気にもなれない。

それどころか、頭の中は積りに積った鬱憤<sup>うつぶん</sup>でいっぱいだ。言葉にこそ出さなかったが、脳内では愚痴<sup>ぐち</sup>が爆裂している。

それなのに、怒りに任せて淹れたコーヒーが濃すぎて不味<sup>まず</sup>い。

「うっ」

完全に、苦いや渋いを通り越してしまっていて、ますます気分が滅入った。

なんだか今日は本当に最悪だ。

これでまだ火曜日だなんて信じたくない。

しかも、こんなときにかぎって給湯室の扉がノックされる。

「百目鬼。ちょっといいか」

声をかけて来たのは嶋崎だった。昨日の今日なので、なんとなく顔を直視しづらく感じた。

しかし嶋崎はというと、何かいいことでもあったのか、妙に声が弾んでいる。

「——はい。なんででしょうか」

杏奈が答えると同時に、扉が開いた。

嶋崎は広くもない給湯室に入ってくると、後ろ手に扉を閉める。杏奈は一瞬ドキリと



した。

二人きりになると、嶋崎はシンク上の換気扇を回してから、スーツの懐に忍ばせた煙草を取りだした。

「え？ これって私の前だから？ それとも私が知らなかっただけで、実は前からこんな調子なの？」

嶋崎は、慣れた手つきで煙草に火をつけ、まずは一服した。

なんとなく杏奈が視線を彼の口元に向けると、途中で目が合った。

にこりとされて、コーヒーカーップを握る手に力が入る。いつになく杏奈は動揺していた。「いや、昨夜はびっくりしたよ。真面目だけが取り柄の子かと思っていたら、素顔は夜の蝶だもん。永沢から聞いたけど、けっこう売れっ子なんだって？ お世辞やおべっかは言ってくれないけど、しつかり話を聞いてくれるから、一度ついたお客は離れないって。あいつにしては珍しくベタ褒めだった」

話し始めた嶋崎は、やはり機嫌がよかった。

だが、話の内容はといえば、杏奈にとってはどうでもいいことだった。

今ここで必要なのかと聞かれたら、答えはノーだ。これは完全にプライベートな内容だ。しかも、「素顔が夜の蝶」と言われて、そうでなくても悪かった気分がさらに悪くなる。たとえ嶋崎自身に悪気がなくても、言われて気分がいい言葉ではない。嶋崎にとつて

は、一服ついででの戯言なのだが、杏奈にとつては不愉快極まりなかった。

公私の切り替えもできない男だったのかと、嶋崎に対してがっかりする。

「そう。ヘビースモーカーに見えるのに」

昨夜の落胆も合わせて、これまで多少はあつた彼への好感が激減した。

「うちに来る前から勤めていたみたいだから、向こうが本職ってこと？ そのわりに遅刻や欠席、早退さえ一度もない。見事に二足のわらじを履きなしているのが立派だよなけど、そうまでして働く理由が何かあるの？ 支障がなければ教えてほしいんだけど」

嶋崎は話を続けたが、杏奈は飲みかけのコーヒーをシンクに捨てた。

カップを洗って棚に戻す。

「いえ、私から言うことは何もありませんので」

いきなりプライベートに踏み込んできた嶋崎の顔を見る気になれず、背を向ける。

それが気に入らなかつたのか、痛いほどの視線を感じた。

やはり昨夜の背中への視線も、嶋崎だったらしい。

室内では、彼が吐息のようにはきだした紫煙が、甘い香りを放っている。

「失礼します」

杏奈は軽く会釈だけして、扉のノブに手を伸ばした。

すると嶋崎は、いきなり杏奈の腕を掴んで自分のほうへ引き戻す。

「待って。登録している派遣会社の規約がどうなってるのかは知らないが、うちでは掛け持ちはアウトなんだ。そこ、わかってるのか」

思いのほか距離を縮められて、杏奈の心臓が飛び跳ねた。

それが掴まれた腕のためか、彼が切り出した言葉のためなのかはわからない。

ただ、一度飛び跳ねた心臓は、鼓動を速めるばかりで鎮まらなかった。

ドキドキなのかビクビクなのか、とにかく杏奈は振り向きざまに嶋崎の手を振り払った。

（どうしよう……。いや、どうしようじゃないわ。当然のことを言われただけなもの）  
自分の中で、まずは状況を整理しようと思える。

（私は派遣。掛け持ちはアウト。ただ、それだけよ）

杏奈にとって、この場で最優先するべきことを考え、結論を出した。

責任と覚悟を持って、嶋崎と目を合わせる。

「すみません、知りませんでした。明日からは別の者に来てもらうように手配します。これまでお世話になりました」

必要だろう台詞はきちんと言えたはずだ。

だが嶋崎の表情が、一瞬にして変わる。

「何を言い出すんだ。別に俺はそんなつもりで言ったんじゃない……」

「でしたら、どういうおつもりでしょうか。ここは会社です。嶋崎室長は私の上司であり、管理職です。それ以上でも以下でもないですよね？」

こんなことまで言うつもりはなかった。だが止められなかった。

日々、不愉快な思いを重ねてきたのだ。それが、憤りに変わっていた。自分でも嫌な気持ちになるくらい、嫌味っぽい口調になっている。

「っ——」

嶋崎は動揺とも困惑とも取れる表情をした。

この瞬間まで、自分の立場や放つ言葉の意味、重さを忘れていたのかもしれない。少なくとも「他人の上げ足を取りやがって」という顔はしていない。

ただ、だからといって杏奈も今日は気は治まらなかった。

このままこれまで通りの仕事ができるかと自分に問いかけたとき、快く「できる」とは答えられなかったのだ。

「すみません。言葉が乱暴でした。ですが、私が契約している派遣会社では、掛け持ちの拘束まではしていません。なので、ずっと兼業でやってきました。でも、こちらに来ている限り、こちらの社則や規律に従うのは当然のことだと思います。ですから、規律に従えない以上、私は本日で退きます。申し訳ありませんでした。それでは——今日中に仕事を整理し、引き継ぎの用意もしなければいけませんので、これで失礼します」

## 立ち読みサンプル はここまで